

対人業務を考える ーがん患者フォローアップ編ー

医療機関や多職種との連携強化し、 患者支援の充実をはかる (2/2)



薬樹薬局船橋金杉（千葉県船橋市）

ストアマネジャー
管理薬剤師

大西 美恵子氏

がん診療連携拠点病院の船橋市立医療センター（千葉県船橋市）に隣接する薬樹薬局船橋金杉では、ストアマネジャー・管理薬剤師の大西美恵子氏を中心に、フローチャート式「副作用の対応」を用いてがん患者さんへのフォローアップに取り組んでいます。同医療センターとの情報共有など連携関係の下に、患者さんとコミュニケーションをとりながら、有害事象の予防、その影響の最小化に努めています。今回は、医療機関や多職種との連携についてお話をうかがいました。

今号の ポイント

1. 医療機関との連携強化によって、薬剤師の薬学的管理の役割を発揮
2. 食事や睡眠など、生活の基本的な情報も薬物療法の推進に影響する

「お薬手帳シール」と「化学療法治療経過評価表」で情報共有

外来がん化学療法の患者さんを適切にフォローしていくためには、やはり医療センターとの連携がポイントになります。とはいえ数年来の新型コロナの影響は大きく、なかなか対面での関係性を構築する機会がなかったというのが現状です。しかし、2023年になって医療センターによる、近隣4薬局を含め地域薬剤師を対象とした「がん薬物療法医療連携研修会」がWeb開催されました。当日は腫瘍内科の先生から、免疫チェックポイント阻害薬（ICI）の副作用の特徴などの解説のほか、抗がん剤副作用対策で薬剤師にお願いしたいことという内容でお話いただきました。先生からはICIは自己免疫を過剰に活性化させ、正常な臓器を攻撃してしまい重篤で命に係わ

る副作用が起こる可能性があるため、疑わしい症状が見られた場合には主治医に連絡するよう、薬剤師からも患者に伝えてほしいとお話でした。特に治療後、しっかりと経過をフォローアップしてほしいとの要望でした。

講演内容からも、病院側では地域薬局・薬剤師との連携の重要性を強く認識しているのだと感じました。実際、最近は病院から化学療法を受けた各患者さんのレジメンが書かれたシール「お薬手帳シール」が発行されるようになりました。それ以前、私はレジメンを知るため患者さんに診療明細書を見せていただいていたいました。また、患者さんによっては必要に応じ、病院薬剤師が作成した「化学療法治療経過評価表」が渡されるようになりました。

この評価票は①治療内容、②治療歴、③点滴当日の支持療法薬、④前回からの主な副作用、⑤その他——の5項目について記載されています。主な副作用についてはグレード評価、備考欄には副作用の発症時期と対応など、詳細が記載されています。薬局では、その評価表を持参した患者さんについては、より適切な支援が可能になります。

近隣4薬局では以前から、より詳しい患者情報、特にレジメン内容についての情報共有を強く求めている経緯があります。医療センター側の理解を得て、現在は「お薬手帳シール」という形で情報共有できるようになりました。また、「化学療法治療経過評価表」については、コロナ禍前から病院薬剤師と近隣薬局との交流のなかで、求めている情報内容ですので、具体的に薬業連携が進んだ結果だと思っています。

医療センターからの情報提供を受けて、薬局としても必要に応じてトレーシングレポート（TR）等の形で患者情報を返していますが、基本的に医療センターのTRフォーマットは自由記載の形ということもあり、次のことを心掛けています。まず、①長文になると、病院側が読みづらくなってしまうので簡潔にまとめる。重要な情報はアンダーラインなど目立つようにする。②なるべく専門用語は使わず、誤解が生じないよう分かりやすい言葉で記載する。③服薬状況、副作用

の有無など正確な情報を箇条書きで記載する。副作用はグレード評価も記載する——という点です。以前は、がん患者さんの数も少なく、ほとんど一人で対応していましたが、コロナ禍が開けてからは、毎日10名ほど来局されるようになりました。そのため現在は各薬剤師が担当できるよう、フォローアップ後のTRの書き方についても、標準化するように努力しています。

また以前は、私自身、副作用も無い事例でTRを送ることを躊躇していた部分もあったのですが、医療センターの先生方との交流の際に、服用後、副作用もなく「安定していることも情報としてほしい」という意見をいただきましたので、いまは担当の先生にもよりますが、副作用もなく安定しているという情報もお伝えしています。

● トレーシングレポート作成時の留意点

トレーシングレポート作成時の留意点

- 長文になると読みづらくなるため、簡潔にまとめる
- 重要な情報はアンダーラインなど目立つようにする
- 専門用語は極力使用せず、誤解が生じないよう分かりやすい言葉で記載する
- 服薬状況、副作用の有無など、正確な情報を箇条書きで記載する
- 副作用はグレード評価も記載する

管理栄養士との連携で食生活が改善され薬物治療も全クール終了

多職種との連携という点では、隣接する店舗の管理栄養士と連携し、必要に応じて患者さんの食生活のサポート、最適化に努めています。一例を紹介すると、63歳の大腸がんの男性患者さんですが、下痢気味で悩んでおられたので、管理栄養士によるアドバイスをお奨めしました。患者さんには数日間の食事内容を記録してもらい、管理栄養士に聞き取りをしてもらったところ、特に朝、昼の主食の摂取量が不足していたこと、タンパク質の摂取不足が分かり、バランスの良い食生活をアドバイスしてもらいました。特に下痢については消化の良い具体的な食事メニュー、注意点を説明してもらいまし

た。食事内容は改善され、薬物療法にも良い影響があったと認識しています。

この患者さんの場合、多職種連携により食生活も安定し、体力も維持・安定したこともあって、無事に8クールを終了し、趣味のゴルフにも行くことができ、喜んでおられました。薬剤師はどうしても薬だけに目が行きがちですが、日常の食事や睡眠といった基本的な情報がとても大切です。特に化学療法を受けている患者さんの場合、吐き気などにより食欲は落ちがちです。患者さんと密にコミュニケーションをとり多職種でフォローすることが、患者さんの助けになる事を実感しています。